

「ケンゲキオンラインスクール ～音楽を聴こう知ろう」 実践報告

瀧川 淳*

The report on “KENGEKI Online School —Let’s listen and learn the music”

Jun TAKIKAWA

(Received October 29, 2020)

1. はじめに

本稿は、熊本県立劇場主催、熊本大学大学院教育学研究科瀧川研究室監修で実施した「県劇オンラインスクール ～音楽を聴こう知ろう」の実践報告である。

COVID-19の感染拡大が世界各国を襲った2020年冬以降、2月には小中高等学校が臨時休校となり、その後、全国に緊急事態宣言が発令された。6月以降順次、地域の感染状況に応じて学校は再開されたが、現在も感染予防対策の徹底等、これまでの学校生活にはほど遠い。特に音楽科の授業は、全員での斉唱や合唱、また楽器を用いた合奏など、まだこれまで通りに活動できているところはほとんどない。このような状況下において、新しい生活様式のもとでどのような音楽授業を展開したらよいかの議論や提案も徐々に行われつつある。例えば、月刊誌『教育音楽』（音楽之友社）では、2020年6月号以降、毎号新型コロナウイルスの対策を念頭に置いた音楽科の活動について特集を組んでいる。また2020年10月にオンラインで開催された日本音楽教育学会（2020年10月17日）においても会長諮問によるプロジェクト研究で新型コロナウイルス感染症の影響下における音楽教育を発表している。

そんな中、筆者が監修した「ケンゲキオンラインスクール～音楽を聴こう知ろう」は、COVID-19影響下においていち早く、その感染予防対策を行いながら児童たちに質の高い音楽を提供できた企画であること、また今後も続くと考えられる COVID-19の感染予防対策下において劇場と学校が共同で実施可能な企画として本報告書を残しておくことは意義のあることと考える。

なお、現在（2020年10月現在）この企画に関連した報告書や研究は、次のようなものがある。

- 「ケンゲキオンラインスクール ～音楽を知ろう聴こう」（『熊本県立劇場季刊誌ほわいえ』Vol. 6, R2.9, 5～6頁）
- 「劇場の新しいカタチ」（『教育音楽小学校版・中高版』11月号, R.2.10, 1～3頁）
- 「くまもとオンカンサイト」
(<http://kumamoto-onkan.wixsite.com/mysite>)
- 「『ケンゲキ オンラインスクール』の教育的効果について—一児童たちの感想文の比較分析から—」
(瀧川淳『熊本大学教育学部紀要』第69号, 2020.12, 129～136頁)

2. 「ケンゲキオンラインスクール ～音楽を知ろう聴こう」

「ケンゲキオンラインスクール ～音楽を知ろう聴こう」（以下、オンラインスクールと略記）は、公益財団法人熊本県立劇場の主催、熊本市教育委員会、ならびに熊本大学大学院教育学研究科の後援で2020年7月21, 27, 28日に1回30分のプログラムを計7公演開催された。

本企画は、主に県内在住のプロフェッショナル演奏家に演奏を依頼し、熊本県立劇場コンサートホールで演奏し、それを熊本市内の小学校の各教室へオンラインライブ配信するものである。具体的な配信方法は後述するが、筆者は、本企画の発案、監修を行い、また全公演の司会進行をつとめた。

以下、各回の曲目、出演者である（表1）。

* 熊本大学大学院教育学研究科

表1 各回のプログラム

7/21 低学年プログラム (2回公演)
曲目： ①『ラデツキー行進曲』(シュトラウス1世) ②『行進曲』(チャイコフスキー) ③『トルコ行進曲』(モーツァルト) ④『メヌエット』(ペツォルト) ⑤『ミッキーマウスマーチ』(ドッド)
演奏：ピアノデュオ/谷脇裕子, 柴田遥子
7/21 日本の伝統音楽プログラム (1回公演)
曲目： ①『春の海』(宮城道雄) ②『「さくら」より主題と6つの変奏』(藤井凡大) ③『パプリカ』(米津玄師)
演奏：小路永和奈(箏), 藤山雅弘(尺八)
7/27 中学年プログラム (2回公演)
曲目： ①『メヌエット』(ベートーヴェン) ②『クラリネット・ポルカ』(作曲者不詳) ③『チャルダッシュ』(モンティ)
演奏：黒葛原康子(ヴァイオリン)、 春日香南(クラリネット), 吉田秀晃(ピアノ)
7/28 高学年プログラム (2回公演)
曲目： ①『ハンガリー舞曲』第5番(ブラームス) ②『アイネ・クライネ・ナハトムジーク』第1楽章(モーツァルト) ③『プリンク・プランク・プルンク』(アンダーソン)
演奏：黒葛原康子、田中唱(ヴァイオリン)、 黒木奈津美(ヴィオラ), 原田哲男(チェロ)

また本企画を鑑賞した学校数, 学級数, 児童数は下記の通りである(表2)

表2 各回を鑑賞した学校, 学級, 児童数

プログラム	学校数	学級数	児童数
低学年第1回	20	76	2222
低学年第2回	8	21	532
日本音楽	9	30	889
中学年第1回	16	47	1209
中学年第2回	14	30	880
高学年第1回	13	36	1265
高学年第2回	22	62	2052

鑑賞した児童の総数は9049人になる。

3. オンラインスクール企画立案から 申込開始まで

7月21日に初回を開催したオンラインスクールだが, 初回開催までの企画運営は, かなりの急ピッチで行われた。

そもそも5月に入り, まず熊本県の学校が徐々に再開され, さらに6月からは熊本市の学校も再開された。しかしながら再開前から音楽科の授業の要である歌唱や器楽の活動が難しいことは容易に想像でき, それであればできる限り質の高い演奏を届けて児童たちの音楽的な学びを止めない方法はないかと筆者自身も考えていた。

そんな中, 熊本県立劇場の事業スタッフが企画の相談に来たのが5月22日。劇場もまたCOVID-19の影響で前年度から計画していた企画のほとんどがキャンセルもしくは延期になっていた。

筆者からの最初の提案は, 劇場の登録アーティストを学校へ派遣するアウトリーチ活動の展開であった。劇場からも実現可能との回答を得て, すぐに熊本市教育委員会の指導主事に相談したところ, アーティストの学校への派遣は感染症予防の観点から難しいが, 劇場からオンラインで演奏を配信するのはどうかとの提案を受けた。熊本市はCOVID-19感染拡大以前に市内小学校へ23000台ものLTE対応のiPadが整備され, それらを使ったICT教育の展開が進められているところだった。

そこで実現に向けての打ち合わせを行ったのが6月10日。熊本市教育センターで音楽科の指導主事, 教育情報室の指導主事, 熊本県立劇場の事業スタッフ2名と瀧川で, 実施の方法やバックアップ体制, また広報の方法について話し合いをもった。教育情報室から配信は音質的にYouTube Liveを使用するのが良いとのアドバイスももらった。そこで演奏者と児童たちとのやりとりはZoomを使用し, コンサートホールから演奏を届けるのはYouTube Liveを使用することとした。開催の日程については, 劇場側で設定し, その日時で視聴可能な学校が申し込みをする形とした。また学校への広報は, 音楽科の指導主事から校長会ならびに熊本市小学校音楽教育研究会へ配信することになった。

なお公演内容の詳細決定は瀧川によるが, 開催可能な回数から低学年・中学年・高学年の3つに分けて開催し, そのほか, 邦楽器のアーティスト手配が可能であったことから日本の伝統音楽を別に1回設けることにした。プログラムの立案に際しては, 今回のオンラインスクールが, 音楽科の授業計画のひとつに位置付けられるよう演奏曲目の中に必ず教科

書教材を配置するようにした。そして選曲に当たっては、まず県立劇場が手配可能なアーティストの楽器編成をリストアップしてもらい、小学校6学年分の鑑賞教材と照らし合わせて、演奏可能な曲を選曲した。選曲にあたっては、熊本大学教育学部附属小学校の中島千晴教諭にも助言をもらった。

演奏者の手配がほぼ完了したのが7月初めで、演奏者へは順次、演目に含めてほしい楽曲を伝え、その際に、児童たちがその楽曲をどのような意図で鑑賞するのかを説明し、それと関連づけられるような楽曲を他に提案してもらった。例えば、低学年のプログラムのキーワードは行進曲と2拍子・3拍子、高学年では弦楽器の奏法や長調短調の違いをテーマにして候補曲を考えてもらった。

7月初めに、演奏者と劇場のスケジュール、また小学校が8月から夏休みに入ることを勘案して、7月21、27、28日の3日間で開催することを決定し、そのテスト配信を7月9日に実施することになった。開演時間の決定も大きな問題だった。小学校の1授業時間は45分だが、アクセスに手間取ったり、次の授業時間のことを考えると45分でプログラムを組むことは難しく、加えて、学校が再開して間も無くのこの時期、まだ学校は大きな混乱の中にあり、学校ごとに授業時間の開始が異なるということを知っていた。そこでいくつかの授業時間を事前に調査し、大体の学校で授業時間内にすべて視聴できるよう1プログラムを30分で構成して開演終演時間を決定した。したがって、学校によっては、オンラインスクールの前に事前学習を行わなければならない学校もあれば、オンラインスクールの後に事後学習を行わなければならない学校もあったが、それは後述する形で、それぞれの学校に配慮した。

またこの間には、配信業者との打ち合わせ、コンサートホールへのインターネット回線の開通を行っている。

テスト配信は、熊本県立劇場コンサートホールから熊本市教育センター教育情報室、熊本大学教育学部附属小学校、熊本大学教育学部山崎研究室、熊本市立黒髪小学校へ同時配信し、接続確認と音質画質のチェックを行った。テスト配信は、ヴァイオリニストの黒葛原さんに演奏を依頼し、実際にステージで演奏してもらい、それを前述した場所へ配信した（写真1）。

このテスト配信の結果、改善を要した点が1点あるが、それは後述（5.）する。



写真1 テスト配信時のステージ

4. 募集開始から当日まで

当初、双方向で児童たちの質問をオンラインスクール中に受ける予定で参加校数を限定していたが、児童たちの質問はなしにしたので、参加校数の上限を取り払い、また申し込みも前日まで受け付けることにした。

申し込み校に対しては、事前に当日のYouTube LiveとZoomのアドレス、またアクセスに際しての諸注意を個別に配布すると同時に、当日の進行表や簡単な曲目解説、そして企画（学習）のねらいを事前配布している（参考までに低学年のプログラムで配布した進行表を図1、2、3として載せる）。

これにより鑑賞した学校によっては、前時にその楽曲を学習したり、また演奏曲目と関連のある教科書教材を学んだりしたところがあったと聞く。さらに当日は、先生自らプリントを作成したり、黒板に演奏曲目や演奏者の名前を書いたりして、音楽の学びとつながりを持たせながら鑑賞させている学校もあった。

この意味でもいわゆる指導案の略案のような形で進行表を作成し、事前に配布したことは学校側にとってもとてもよかったようである。

またこの進行表は、演奏者へも事前に配布した。そしてこの進行表をもとに筆者（司会者）との事前打ち合わせを行い、進行表の内容や、筆者のねらいを伝える機会を必ず持つようにした。その際に、本企画が音楽を聴かせて終わるいわゆる音楽鑑賞教室ではなく、音楽を学ぶことのできる演奏会であることを伝え、例えば、部分部分を取り出して演奏してもらったり、楽器別に演奏してもらったりすることを伝えている。さらに演奏者には演奏する楽器や楽曲の魅力も話してもらおうよう伝えたが、その際、単に解説本に書いてあるような内容ではなく、演奏者

自身が「これぞ」と思う点を自由に語ってほしいと伝えた。そうすることで鑑賞している児童たちがオンラインスクールそのものや演奏者たちをより身近に感じてもらえると考えた。

演奏者としては、このように無観客のホールで、大型テレビに映し出された Zoom の画面をみながら演奏するスタイルには馴染みがないようだったが、当日は Zoom ごとに鑑賞している子供たちの様子が映し出され、その中には曲に合わせて手を叩いたり体を揺すったりする様子を見ることができ、(ステージ上間近にカメラが複数台あったりカメラマンが多くいたりもしたが) 通常の演奏会とそれほど変わらず演奏できたようだ。

熊本県立劇場 熊本大学 熊本県立劇場文化事業 熊本大学大学院教育学研究科瀬川研究室監修

低学年対象「ケンゲキ オンラインスクール 音楽を聴こう知ろう」

曲目：①「ラデツキー行進曲」(シュトラウス1世作曲) ②「行進曲」(チャイコフスキー作曲) ③「トルコ行進曲」(モーツァルト作曲) ④「メヌエット」(ベツォルト作曲) ⑤「ミッキーマウスマーチ」(ドッド作曲)

演奏：ピアノデュオ/谷脇裕子、柴田蓮子

ねらい(1年)
・ 行進曲やおどりの曲調の変化を感じ取って、曲に対して自由にイメージを持って聴く

ねらい(2年)
・ 2拍子とは異なる3拍子の違いを感じ取り、曲に対して自由にイメージを持って聴く

各学年のねらいに合わせた「楽曲の特徴」:

- 同じマーチ(行進曲)でも曲調の異なる4曲を選んでいきます。この4曲を比較聴取することで、様々な雰囲気で行進できることを感じ取らせることができます(もし実際に自由に身体を動かすことができれば、曲によって動作が変わってくることを実感できるでしょう)。また行進曲とひとくりにしても、さまざまな行進の雰囲気に合った音楽があることを知ることもできます【1年】
- メヌエットは3拍子系のヨーロッパに伝わる伝統的なダンス(踊り)です。行進曲(2拍子系)とは異なる身体の動き方ではないと音楽に合わないことを体感させることができます。【1、2年生】
- マーチ(行進曲)は2拍子系の音楽。一方、メヌエットは3拍子の音楽です。この拍子の違いを感じ取らせることができるとともに、それぞれの拍子のもつ雰囲気を感知させることもできます。【2年生】

進行: ※当日の状況に応じて若干進行が変更する場合があります。

時間	MC	演奏者	演奏(その他)
0	●学校の子供たちへ挨拶 ●演奏者紹介		
2	●曲① ・ 「ラデツキー行進曲」 ・ 行進曲の説明 ➢ 行進ってどんな感じですか? ➢ 右左と足踏み ➢ 身体を動かしたり、手拍子してもよいことを伝える ・ →演奏者へ ・ どんな雰囲気の行進曲だったか確認 ・ みんなはどのように行進するか質問	・ 曲の魅力、この曲を演奏する工夫を伝える	【演奏(通し)】 (3分)

図1 低学年進行表(1)

熊本県立劇場 熊本大学 熊本県立劇場文化事業 熊本大学大学院教育学研究科瀬川研究室監修

8	●曲② ・ 「行進曲」 ・ ピアノが2台あることに気付かせる。 ・ →演奏者へ ・ この曲ではどんな雰囲気の行進ができそうか確認する	・ 2台ピアノの魅力や合わせる工夫を伝える ・ 曲の魅力、この曲を演奏する上での工夫を伝える	【演奏(通し)】 (2分半)
13	●曲③ ・ 「トルコ行進曲」 ・ トルコの音楽について伝える ➢ 軍楽隊のリズムをハンドドラムで実演 ・ →演奏者へ ・ この曲ではどんな雰囲気の行進ができそうか確認する	・ この曲の魅力、ピアニストにとってこの曲がどんな曲かを伝える	ハンドドラムに合わせて左手を演奏 【演奏(通し)】 (3分)
20	●曲④ ・ 「メヌエット」 ・ 3拍子の曲であることを伝える。 ・ 行進曲とは少し違う雰囲気を感知取ってもらえるよう伝える ・ →演奏者へ	・ この曲の魅力、ピアニストにとってこの曲がどんな曲かを伝える	・ 3拍子に合わせて左手を演奏 【演奏(通し)】 (1分30秒)
25	●曲⑤ ・ 「ミッキーマウスマーチ」 ・ 曲名を伏せて、みんなも知っている行進曲であることを伝える。 ・ いろいろな行進が見え隠れすることを伝える。 ・ 曲名を紹介 ・ 演奏者改めて紹介 ・ 終演		【演奏(通し)】 (2分)

図2 低学年進行表(2)

熊本県立劇場 熊本大学 熊本県立劇場文化事業 熊本大学大学院教育学研究科瀬川研究室監修

今回の低学年版「ケンゲキオンラインスクール」では、マーチ(行進曲)を中心に、メヌエットといった賑りを取り上げることで、身体の動きを伴った様々な音楽を感じ取ることができます。また身近な楽器でありながら普段聴く機会のない「2台」のピアノによるアンサンブルの妙や響きの多様な音響も感じ取ってほしいと思われました。2年生には、2拍子と3拍子の違いが身体の動きや音楽そのものに影響を与えることにも気づいてほしいと思います。ですがやはり低学年には、音楽に合わせて動き出す身体を抑制することなく、各々が自由なイメージで楽しみながら聴いてほしいという願いから親しみやすい通曲としました。

曲目解説

①「ラデツキー行進曲」
この曲は、クラシック音楽好きにとって年給にウィーンから中継されるウィーン・フィルハーモニーによる「ニューイヤール・コンサート」のアンコール曲として、聴衆の手拍子とともに印象深い曲だと思えます。作曲したのは、ウィーンで活躍した作曲家・指揮者・ヴァイオリニストのヨハン・シュトラウス1世(1804~1849)です。実に多くのワルツを作曲し「ワルツの父」と呼ばれています。
「ラデツキー行進曲」は、1848年に勃発した3月革命でオーストリアの危機を救った英雄ヨーゼフ・ラデツキー将軍を称える行進曲として作曲されました。そのような理由からオーストリア人にとって愛国歌とも言える曲ですが、現在では世界中で親しまれている名曲となっています。
曲の風情は、民衆を鼓舞するような短い音楽から始まり、主題(これはカドリューという4組の男女がスクエアになって踊るダンスから引用されています)が展開し、中間部を経て、再び前奏-主題-展開部が繰り返されます。オリジナルはオーケストラによる管弦楽曲ですが、本日は2台ピアノで演奏します。

②「行進曲」
ロシアの作曲家チャイコフスキー(1866~1893)が作曲した「行進曲」は、バレエ音楽『くるみ割り人形』の中の1曲。1幕の冒頭で、子どもたちがクリスマスツリーの下でプレゼントをもらう場面で演奏されます。
構成はロンド形式。ロンド形式とは、A-B-A-C-A-D-A-...というように、主題(テーマ:A)とその間に挿入される様々な旋律(挿入部:B、C、...)からなる音楽です。この曲では、軽快なファンファーレ風の主題(テーマA)の間に、様々な様子や心情を思い浮かべることができる可愛らしい旋律が取り込まれています。
この曲もオリジナルはオーケストラですが本日は2台ピアノで演奏します。2台ピアノで曲を親しみ、構成を把握したら、オーケストラ版を鑑賞してみるのもいいでしょう。オーケストラならではの多彩な楽器による色彩豊かな曲想をより味わって聴くことができます。

③「トルコ行進曲」
シュトラウス1世と同じくオーストリアで活躍したモーツァルト(1756~1791)の作品。「トルコ行進曲」として有名なこの曲は、彼のピアノ・ソナタ第11番イ長調第3楽章です。なぜトルコ行進曲というのかというと、左手の楽楽「ぶん・ちゅ・ちゅ・ちゅ、ぶん・ちゅ・ぶん・ちゅ」がオスマン・トルコの軍楽隊の打楽器を模倣しているからだそうです。

④「メヌエット」
しばしば前ではヨハン・セバスチャン・バッハ(1685~1750)の作品として親しまれていました。なぜならバッハが愛アンナ・マグダレーナに贈った「アンナ・マグダレーナ・(バッハの音楽家)」(1725)に取められていたからです。しかし今は、ハンズ・ヨアヒム・ベツォルトの作と改められています。ベツォルトはバッハよりも87年上のバロック時代のドイツの作曲家、オルガン奏者でした。
タイトルのメヌエットとはフランスで生まれた3拍子の比較的ゆっくりとした小さなダンスです。とてもかわいらしく親しみやすい2つの大きな楽節からなる2部形式というわかりやすい構成の小品です。ピアノを習っている児童は弾いたことのある曲かもしれませんね。

⑤「ミッキーマウスマーチ」
ディズニーの代表的なキャラクターであるミッキーマウスのテーマで、1955年から1960年にかけてアメリカで放送されていたテレビ番組「ミッキーマウス・クラブ」のオープニング曲だったそうです。もともとは歌詞がついていますが、今では様々なアレンジで親しまれています。
文責・構成:瀬川洋(熊本大学大学院教育学研究科)

図3 低学年進行表(3)

5. 配信の技術的な運営について

今回の「オンラインライブ」は、熊本県内で映像音楽配信やライブ配信を手がける株式会社 Hub.craft (<https://hub-craft.com/>) に映像配信を依頼した。

本配信までの過程は、まず県立劇場との打ち合わせで Zoom の中に演奏を配信する YouTube Live を埋め込む可能性を検討したが、画質音質が十分に保証できないという観点から県立劇場からの配信を YouTube Live で、また奏者・司会者と児童たちのやりとりを Zoom で行うこととしてテスト配信に望んだ。

テスト配信の際に用いた機材は、3台のカメラ（下手上手には一眼レフカメラ、中央にビデオカメラ）と、映像を切り替えるためのスイッチャー、そして映像を配信するためのエンコーダー（今回は Liveshell.X を使用）である。

このテスト配信で浮かび上がった問題は、想定以上に Zoom と YouTube Live ではディレイ（遅延）の差があるということと、その遅延した音を拾ってしまいエコーのようにホールや教室に響き渡ったという点である。そこで演奏を問題なく配信することを第一に Zoom によるホール側と児童たちとの相互作用的なやりとりを断念し、Zoom の音声はすべて切ることにした。また YouTube Live の配信遅延を少しでも軽減するため、音質は落とさずに映像の質を若干落として配信することとした。

その後、本番までに、Hub.craft の提案により舞台後方から客席を望むアングルのカメラを1台追加で設置した。その結果、時に演奏者の背後からホールの客席を望むことのできる映像の配信が可能となり、より臨場感溢れるライブ映像の提供が可能となった（写真2）。これは無観客で行われたオンラインライブ以外には難しいアングル（通常なら観客が映り込んでしまうため）であるが、アンケートにおいてもこのアングルの良さを指摘する意見が多くでた。会場での鑑賞では、なかなか味わうことのできないオンラインライブ配信の利点のひとつであろう。

本番までに、撮影を想定したりハーサル等は特に行われなかったが、事前に曲目とプログラム進行を伝えてあり、本番中のカメラの切り替えは実にスムーズで要所要所的に確に映し出しており、それは演奏曲や話の流れと合って我々が意図した点に児童たちが焦点化して鑑賞できたことが子どもたちの感想からも読み取ることができた。

今回、本節をまとめるにあたり、改めて株式会社 Hub.craft へインタビューを行った。その中で、今回

の様な劇場ホールから学校へ配信する企画はこれが先駆けであること、またこのようなライブ配信の需要は様々な方面で拡大しているようである。一方でライブ配信はまだ導入期にあり、会場側の設備が整わず企画が実現できないケースもあると聞く。第一の問題は配信をするための回線の整備である。今回の企画で延9000人もの児童が県立劇場からの演奏を鑑賞できたのは、この企画が立ち上がった段階でまず回線の整備を行った県立劇場の準備にあるといってもよいだろう。



写真2 ステージ後方からのカメラ映像

6. 本番について

本番当日は、3日間ともに、1時間前より Zoom と YouTube Live の接続確認のために回線を接続状態にした。

学校側をお願いした準備としては、インターネットに接続できる端末を2台、鑑賞する各教室に用意してもらい、1台は Zoom 用に教室の児童たちの様子をコンサートホールに映し出すためのもの（写真2の中央にあるような形でコンサートホールの通常指揮者が立つ位置に大型ディスプレイを設置し、そこに各教室の児童たちの様子を映し出した）。もう1台は YouTube Live に接続してコンサートホールの演奏映像を映し出すためのもので多くの学校ではそれを電子黒板や大型テレビにつないで鑑賞したようである（写真3）。またいくつかの学校は、タブレット端末の音声を外付けのスピーカーやオーディオにつないでより良い音響で鑑賞していたと聞く。



写真3 オンラインスクールを教室で鑑賞する児童たち

開演の前には、開演10分前、5分前に司会を務めた筆者が学校側へ映像、音声確認のためコンサートホールから注意を流した。この注意というのは、Zoomは音声をオフにして端末固定で教室の様子をコンサートホールに送ってほしいというお願いと、音響や映像がより優れたYouTube Liveで演奏は鑑賞してほしいという希望を伝えた。

本番では、まず初めに鑑賞している学校の名前をコンサートホールから読み上げた。これは、児童たちにより一層のライブ感を味わってほしいという意図があったが、後ほどの感想を聞くとこの試みは大変効果的だった様である。また熊本在住の演奏家たちによる演奏であったことも、児童たちが身近に感じることのできる要素の一つであったように感じた。

オンラインスクールは、いわゆるレクチャーコンサートに近い形で構成したことで児童たちは楽しく聴きながら学びを深められたようである。例えば、低学年の回で演奏してもらったモーツァルト作曲のトルコ行進曲では、特徴的なリズムを司会者が太鼓で叩き、それに合わせるようにピアノの左手を入れてもらうといった演出を行った(写真4)。またその他の回でも、楽器の発音原理や多様な奏法を説明したりしてもらったが、その際にはカメラでその場面をズームしてもらい視覚的にも児童たちが焦点化

できるように配慮した。

今後詳細な分析をしなければならないが、こういった細やかな配慮が、オンライン配信であっても臨場感やライブ感を感じさせたと考えている。



写真4 低学年プログラムの1場面

7. おわりに

熊本県立劇場コンサートホールの収容定員は1810名なので、第1回目と第7回目の公演はこの収容定員を超えている。これだけの数の参加児童数があったのには、まず短い期間の中でこの企画を教育委員会に周知徹底していただいたおかげもあるが、もうひとつには児童の引率を必要としない企画であったというのがあるようだ。

詳細な分析は別稿で発表するとして、先述した通り、鑑賞した児童たちや教師たちから本企画はコンサートホールにいるかのような臨場感やライブ感を味わうことができたとの多くの声があった。つまり今回のオンラインスクールのような音楽鑑賞の形は、良質の演奏をより多くの(例えば地理的になかなか演奏会場に足を運ぶことのできない児童たちにも)児童たちに届けることができる可能性を持っていると言える。またこれは劇場スタッフの願いでもあるのだが、本企画を通して、劇場で演奏される音楽に興味を持ち、劇場へ足を運ぶ児童たちが増えてくれることも、本企画の趣旨のひとつである。

8. 謝辞

本稿の執筆に多大な協力をいただいた(公財)熊本県立劇場、及びHub.craftの関係者各位に厚く御礼を申し上げる。